

新発削—教えるということとは教わるということ

東 泰孝

Yasutaka Azuma

大阪府大院・生命環境科学研究科・獣医学専攻動物構造機能学分野
統合バイオ機能学講座 azuma@vet.osakafu-u.ac.jp
一番左で座っているのが私です。



2005年4月より大阪府立大学・獣医・応用薬理学教室に助教授として着任した東泰孝です。岐阜大学海野先生よりリレーのバトンを引き継ぎました。私は、高校の時から新薬を開発して病気に苦しむ世界中の患

者を助けたいとの思いで研究者を志望しており、薬のことなら薬学部だと思い、薬学部入学を選択しました。出身は摂南大学薬学部です。今、大学の教員をしている自分を振り返り、そのきっかけはどこにあったのか

417

と考えてみますと、やはり恩師であります米田幸雄先生(現、金沢大学大学院自然科学研究科教授)との出会いであります。米田先生は当時、一年次の生理解剖学の講義を担当しておられ、何かの質問のときに、米田先生が5年後に国際学会をするから、大学院に来て一緒に外国人をお世話して、京都観光にでも連れて行かないか、とお話しておられました。その話だけに釣られて選んだ訳ではありませんが、研究室配属では、薬理学という科目は全く苦手で得意でも好きでもなかったのですが、入学当初から大学院への進学を考えていたこともあり、発表論文数も多く、活発に研究活動しておられた米田先生の研究室を選びました。ここからが私の研究者としての人生の始まりです。研究テーマは、脳神経系におけるグルタミン酸のシグナル伝達経路の解明についてでした。研究室では、毎週月曜日にデータ検討会があり、実験に失敗したりして、1週間何もデータが無いときには、それはそれは恐ろしいデータ検討会でした。今、振り返れば懐かしい時間です。国際学会にも何度も連れて行って頂き、また、短期ながら、フランスへ実験を習いに行かせてもらったりと、世界に目を向けることを教えて頂きました。その後、世界を旅することが趣味となり、色々な価値観に触れることで、逆に自分自身を知ることになりました。

その後、ご縁あって、大学院を中退して大阪歯科大学の薬理学講座にて助手を務めました。やはり大学院生時代とは違い、ここでは、研究資金の獲得から、研究テーマの考案、日々の実験プロトコル作成に実験遂行、そして論文作成まで、全て自分で行わなければなりません。しかも、研究テーマはマクロファージや好中球など炎症関係へと、劇的に変化しました。炎症や免疫は薬理以上に苦手な科目で、助手1年目は悪戦苦闘の連続でしたが、自分の力量不足を感じつつも、しかしながら、一流の研究者を目指すべく、先を見据えて底辺の基礎土台作りだと思い、毎日、毎日が実験、実験の日々でした。今振り返ってみれば、この頃は教育の仕事や委員会・会議などもほとんどなく、ひたすら実験だけを行えたことは幸運でした。この経験が今、大きな財産となっています。

博士の学位を取得後は、海外への留学を志望し、米国Yale大学医学部免疫部門のRichard Flavell研究室にて自然免疫の仕事に携わりました。Nature, Science, Cell誌を量産するRichardが手紙一つで私を雇ってくれたことは帰国後の現在でも謎のままですが、この研究室はいわゆる多国籍ラボで世界中から優秀な人材を集めていて、彼らと親交を持ったことも、本当に幸運だったと感じています。留学を終えて、私が研

究者として大きく成長できたと感じることは、一つの実験を行う前に、丹念に既報論文を読み調べ(当たり前です、今までもやりました)、十分に実験プロトコルを練り上げ(これも当たり前ですね)、如何に無駄な実験を省き(当の本人はそのつもり?)、本当に必要な実験だけに取り組む姿勢(これの見極めが難しい)でした。そんなことは当たり前だ、とお叱りの声が聞こえてきそうですが、「科学する力」とはこういうものなのだ、と肌で感じ続けられたラボライフでした。そのため僥越ではありますが、論文作成作業において、最も大切な項目は、目的でも結果でも考察でもなく、方法である、と現在は思っております(これもまた、異論が聞こえてきそうですが・・・)。

薬学の薬理をスタートに歯学の薬理、そして、獣医学の薬理へとご縁を繋いできました。この間、一貫して薬理学に関わる幸運に恵まれたことも、日本薬理学会のご縁だと感じている次第です。

現在、ご指導頂いている竹内正吉教授は、消化管の平滑筋運動に関して数多くの業績を報告しておられ、帰国後のドタバタから未だ脱しきっていない私の遅々として進まない研究状況を根気よくまた辛抱強くお待ち頂いているところです。結局、すぐに出せるような結果は、医療や治療など科学への貢献度が少ないのかもしれない、と、自分に言い聞かせながら(言い訳?)、現在の研究テーマは、消化管における免疫調節機構ならびに感染防御機構に興味をもって取り組んでいます。さらに、平滑筋運動と感染成立との関わりにも興味があり、平滑筋運動に関わる神経伝達物質による感染防御調節機構の解明などにも取り組んでいます。

最近では、研究者としての自分に加えて教育者としての役割を求められています。では、どんな教育者を自分自身は目指しているのかといいますと、例えば、私自身がノーベル賞を受賞することよりも、ノーベル賞を受賞する人材を育てたいと思っています。野球に例えれば、名選手よりは名監督を目指しています。もちろん、自分自身の実験を通じて、日々新しい結果を得たいですし、細胞やマウス個体からの新しい情報に驚かされたいと願っている毎日です。このように、日々の研究活動の中で私が強く望んでいることは「驚く」ということです。同時に、教育者としても、学生にこの「驚き」を与えたいと思っています。教員は学生よりも知識や経験は豊富です、しかしながら、彼らは私の持っていない斬新な感覚を持っていて、彼らの感覚を学べることも、私の教育者としての楽しみとなっています。薬を開発して病気を治すことを目指している私ですが、同時に、次の時代のためにも有為の青年を探しているところです。

編集部註：タイトルの「新発削」の削(ケイ、といし)の常用体は削。削は範型の意で、その型に磨きをかけることをいう。荘子の養生主に、庖丁が文惠君のために牛を解き、しかも刃こぼれもなく「刀刃新たに削より発するが若し」という。古代には玉器が盛行し、その精品も多いが、玉造りの技術の大部分は、その磨研のしかたにあった(白川静、字統より)。